

(續) 鯉の Kyphoskoliose に就て

ブソンは今回 *Syntomis* なる屬名を *Amata* と訂正せり。  
(三宅恒方)

## ● 河鯉の Kyphoskoliose に就て

滋賀縣水産試験場長川端重五郎氏の厚意により。同縣  
阪田郡醒井村の養魚場にて Kyphoskoliose に罹りたる河  
鯉の標本を得、同時に、其の發病前後の状態に就き、多  
少聞知することを得たり。

件の河鯉標本の大きさは左の如し。

吻端より尾端迄の長さ(體の曲れる儘) ..... 二〇〇〇種  
體高(背緒の體前端にて測定) ..... 四・三種  
頭長 ..... 三・九種

背緒は疊まりて、體の背面に密着せんとする傾向を示  
し、尾緒の下半(殊に其の下端)は、著しく削磨して原形  
を失し、且つ多少肥厚せり。

脊柱は吻端より一〇種位の處(背緒の後端より僅かに  
後方。後方より數へて第二十八椎骨の邊)にて、一旦、  
下方に曲り、吻端より一一種位の處(同上第二十三椎骨  
の邊)にて、再び上方に曲り、更に脂緒の存在する邊(同  
上第十三椎骨の邊)にて又下方に曲れり。故に、尾は著し  
く下方に向へり。前述したる尾緒下半の削磨及肥厚は、  
尾が斯の如き位置を保つより、水底と接觸すること比較  
的多きが爲に生じたる現象なるべし。尙ほ尾緒の下半は、  
垂直の位置を採らずして、其の下端少しく左側に偏せる

故全體として稍斜になれり。之又、病魚が生時水底に接  
すること多かりし事實を暗示するものならんか。

脊柱は、上述の如く、單に上下(背腹)に彎曲するのみ  
ならず、又左右にも彎曲せり。即ち、吻端より的一〇種  
の處(脊柱が始に下方に曲れると同一の處)にて、稍著し  
く右側に曲り、脂緒直下の邊(第二次の下方彎曲の在る  
部分)にて、極めて少しく左側に曲れり。

各椎骨の形態には別に變化なく、椎骨間の *Synostose*  
もなく、又、椎體軸の縮小も無し。唯、脊柱全體が種々  
なる方向に彎曲せるのみ。即ち、此の場合は、*GEMMILL*  
が脊椎畸形の分類中、(c)の項に相當す。

前掲の症狀の外、別に特異なる症狀を認めず。體色の  
黒變も亦之無し。(但し余の檢したる標本は、採集後、*フ*  
*オルマリン*中に貯藏せられありたる者なり)。

本標本發病前後の状態に關し、滋賀縣水産試験場より  
得たる報告を採録せば左の如し。

『明治四十五年二月三日發眼卵を以て米國より本場着、  
三月三日孵化終了、三月二十四日浮立始め四月十日全く  
之を終る。四月十八日平均體長〇寸七分五厘のもの五二  
一六尾を本縣阪田郡醒井村宗谷藤野養魚場第二〇號地  
(面積七五坪八、水深五尺、換水量一分間平均六斗)に放  
養す。』

餌料としては同養魚場の調製に係る蠶蛹粉蝦粉麥粉三  
種混合餌料を用ひたり。其製法は三種の粉末を重量より

略ぼ四四及二の割合に混じ、尙少量の食鹽を加へ、水又は微温湯を以て能く捏ね拳大の團子として蒸籠にて蒸し、冷却せざる間に一定の金網目（成長するに従て網目は大となる初めは方五厘目）を通じて壓潰し適度の大きさとし充分冷却せしめて毎日三回に投與す。

水質は湧水、水温は殆んど上下なく毎日攝氏十四度なり。

大正元年八月二十三日前記放養魚を取揚げ平均體長四寸六分のもの一五九尾を得たる中に本標本を採捕せり。即ち標本は其の時まで游泳し得たるものにして爾後此の飼養法の下に大正三年一月十一日まで十二尾の同様病魚を生じたるも大正三年以後は之を認めざるに至れり。

病魚は初め健康魚の運動敏活なるに反し漸次遲鈍となり體色黒變するに至り攝餌せず體瘠瘦し蹠踉として池邊に來り數日の後遂に斃るゝに至る體の彎曲するは變色以前の事にして單にそれのみにては運動に大なる妨なきものの如し』

脊柱の彎曲は、魚類には可なり屢々見らるゝ病理的現象にて、GEMMILL も其の "Teratology of Fishes," 1912 中に、多くの既知の例證を擧げたり。

本症は、一般に、唯 "Skoliose" なる名の下に呼ばれあれど、其の症状は種々ありて、嚴密に云はば、其種類には、Skoliose, Kyphose, Lordose 等數多かるべく、又夫等諸症の並發もあるべし。現に、HOFER の魚病學書中

"Skoliose" なる題下にある第九十三圖(鯉)の如きは、Skoliose と共に明かに Kyphose も存在することを示し、又 SURBECK が "Scoliose et autres phénomènes pathologiques observés chez un Nase (*Chondrostoma nasus* L.)," ("Bull. Soc. Centr. d'Aquicult. et de Pêche," Tome XXV, 1913) と稱する論文にて報告せる一例の如きは "Scoliose" と題しながら、實際は一種の Kyphose にて、著者自身の言に徴するも、體軸の左右的屈曲は、外面より之を認むること能はざりし由なり。余の檢したる河鯉の標本は、其の脊柱、前述の如く、上下(背腹)及左右に彎曲する故、之を Kyphoskoliose と呼ぶ方適當ならん。

魚類の脊椎彎曲の基因に就ては、學者の間に種々なる異説ありて、未だ歸一する處無きが如し。或は之を先天的のものなりとし、或は生理的のものなりとし、或は又、發育の初期に受けたる器械的の刺戟に據るとす。細菌學的研究も行はれたれど、未だ陽性の結果を齎すに至らず。又、PLEHN 等の研究に據れば、*Lentospora cerebralis* の寄生に依つて、所謂旋轉病に罹れる鮭科魚類の稚魚は、其の病狀の一部として、脊柱彎曲、體色黒變等の現象を表すと云ひ、多少本文中の河鯉の症狀と類似する點あれど(前出引用報告文參照)、一方又 *Lentospora* は、特に軟骨に寄生するものにて、從て軟骨の多き稚魚のみを侵すものなりと云へば、今回の河鯉の場合とは、自から趣

を異にせり。尙ほ、余は、念の爲、脊椎骨の檢鏡をなしたれど、*Leutospora* の胞子を發見すること能はざりき。

(石井重美)

### ●ニベ類の發聲

ニベ類 (*Scienuidae*) が海中にありて發聲することは信すべき教本に見えたるも我邦に於てこれを實證せること無かりし(少くも余自身は)が、近時木下博士が九州三角にて實驗せる處によればシログチは生洲の中にありてぐーぐーと發音する由、但しこの類は生洲中にては長く生活することなく、また之を戶外に取り出せる時は鳴かざりしものゝ如しと、シログチは何の種に當るかは今不明に及べり、將來の研究にて明瞭するに至るべし、またグチの類が各種皆鳴くものなるかは一々研究するの要あらん。

(田中茂穂)

### ●エゾシロテフは輸入種か

エゾシロテフ (*Aporia crataegi* L.) の本邦に産するものは米國より輸入せられたるものとなすの説は一般に信せられ居るが如く、例へば松村博士『昆蟲世界』第二卷)は『曾て歐洲より米國に輸入せられ次で本邦にも輸入せられ北海道南部地方には普通なる大害蟲なり』と述べ、長野菊次郎氏『昆蟲世界』第五卷第五十號)は『始め歐洲より米國に移り次に日本に來れりと云へり』と記せり。然らば本種の輸入の年代は如何と云ふに、松村博士(同上)

は『菓樹の害蟲の如きは明治二三年頃其苗木と共に入りたるべく』と記せるのみにして、本種輸入の年代につきて明確なる記録を擧げず。即ち先づ其の食樹たる苹樹の傳來を知らざるべからず。田中芳男の說(『日本園藝雜誌』一一七號)『苹果傳來の沿革』によれば苹樹を轉入せる始めは文久元年(一八六一年)にして、福井藩主江戸巢鴨の別邸に移植せるを本邦に傳はりたるの創始とす。慶應元年(一八六五年)開成所にて右の樹枝を切り採り海棠及林檎の砧木に接ぎ増殖を圖りしが維新に際し廢絶せしも尙幾分有志者の手に残りたるべし。明治五年(一八七二年)開拓使にて米國より數十種の苗木を移入し北海道及各地へ頒布し、又勸業寮にても米國より苗木を移入せりと、此等の歴史によれば、若しエゾシロテフが文久元年に輸入せられしものとすれば同種は東京附近に先づ傳來し蕃殖せしものなるべく、次で明治五年に米國より移入せし苗木につれて北海道に渡りしものと見ざるべからず。然らざれば明治五年に始めて北米より輸入せられしものと認めざるべからざるなり。

然るに吾人は茲に此の問題の解決に見逃すべからざる一書を有す。其は De L'ORZA の "Les Lépidoptères Japonais a la Grande Exposition Internationale de 1877" なりとす。即ち一八六七年(慶應三年)佛國巴里に開かれたる萬國大博覽會に日本政府より出品せる鱗翅類の研究報告にして此の出品物に加ふるに Dr. BOISDUVAL の日